ラオス国口唇口蓋裂患者支援センター・琉球大学医学部 歯科口腔外科教授 砂川 元 先生へのインタビュー

日時：平成18年10月4日（水）14：30～
場所：琉球大学医学部附属病院 歯科口腔外科医局

砂川元先生（左）と玉井理事（右）

＜質問項目＞

①ラオスでの口唇口蓋裂治療を行うようになったきっかけ……63
②ラオスでの医療と日本における医療との違いについて……63
③ラオスでの医療活動を行う中で得るものや感じるもの・
　ラオスの人々とのふれあいの中で考えさせられること……64
④日本（沖縄）の医療チームについて　……64
⑤ラオスの医療・日本の医療に欠けているもの　……65
⑥今後の展望について ……66

○玉井理事　本日は、沖縄平和賞受賞ということで、本当におめでとうございます。本日はいくつかご質問させていただきますので、宜しくお願い致します。

○砂川先生　ありがとうございます。こちらこそ、宜しくお願いします。

ラオスでの口唇口蓋裂治療を行うようになったきっかけ

○玉井理事　現在のように、口唇口蓋裂の治療をラオス国で行うようになったキッカケは、何だったのでしょうか？

○砂川先生　今回、このような大賞をもらって、正直言って驚いているところでございます。私の札幌医科大学の恩師である小浜教授がベトナムにおける海外医療援助として、この口唇口蓋裂治療をやっていたんですね。

日本口唇口蓋裂協会の方が、「ラオスがまだ手が付けられていません。先生、どうですか？」というお話をいただいたんです。なぜラオスかということなんですが、ご承知のように、1992年から琉球大学医学部で公衆衛生プロジェクトがあり、それから、1999年からセタティラート病院改善プロジェクトがあったということで、琉球大学医学部は、ラオスと縁があるんですよ。その縁があって、僕のベトナムでの実績といいますか、それが認められてラオスを任されたというのがキッカケです。

ラオスでの医療と日本における医療との違いについて

○玉井理事　最初の頃は大変だったんじゃないですか？

○砂川先生　ベトナムでこの口唇口蓋裂治療のミッションをしてきたという実績がございましたから、特にわれわれが苦労したということはそんなにないんです。ただ、一回目にラオスに伺った頃には、あちらの当時の病院長は内科の先生で、副院長（今の病院長）が外科の先生だったんです。おそらく、内科の先生だったので、病院内に“このようなミッションがくるよ”というような周知がなかったんでしょうね。われわれが、手術しているところに外科医である副院長が来て、「あんた方は、何しに来たんだ!? こんな手術は僕でも出来る！」という

ラオス国口唇口蓋裂患者支援センター・
琉球大学医学部 歯科口腔外科教授
砂川 元先生

【学　歴】
昭和41年 3 月　琉球政府立 首里高等学校 卒業
昭和42年 4 月　日本歯科大学 入学
昭和48年 3 月　日本歯科大学 卒業
昭和48年 4 月　東京医科歯科大学歯学部 専攻生（第一口腔外科学講座）
昭和52年 4 月　札幌医科大学歯学部 研究生（口腔外科学講座）

【職　歴】
昭和48年11月　東京医科歯科大学歯学部附属病院 医員（第一口腔外科）
昭和52年10月　札幌医科大学 助手（口腔外科学講座）
昭和58年 4 月　北海道立衛生学院講師 兼 札幌医科大学助手
昭和59年11月　札幌医科大学 助手（口腔外科学講座）
昭和60年 4 月　琉球大学医学部 助教授（歯科口腔外科学講座）
平成 7 年 3 月　琉球大学医学部 教授（歯科口腔外科学講座）
平成16年 4 月　琉球大学 教育研究評議員
平成18年 4 月　琉球大学医学部附属病院 病院長補佐
（医療安全管理対策室長）

【学　会】
・日本口腔外科学会 評議員
・日本口腔科学会 評議員
・日本口蓋裂学会 理事、評議員
・日本頭頸部腫瘍学会 評議員
・日本口腔腫瘍学会 理事、評議員

【資　格】
・医学博士（札幌医科大学）
・日本口腔外科学会 指導医、認定医
・日本顎関節学会 指導医、認定医
・日本歯科薬物療法学会 臨床治験担当者認定

【学術交流ならびに海外医療援助活動】
平成9年、10年、11年、13年 中国広西壮族自治区広西医科大学
平成11年、12年 ベトナム国ベンチェ省グエンディンチュー病院
平成13年、15年、16年、17年、18年 ラオス国立大学、セタティラート病院

ようなことを言われたことがありました。今、やはり、ラオスの医療というのは、周産期医療や子供達が5歳まで何%生きるかというような生命の維持に関わるような医療が重視されているので、われわれの手術というのは、やはり、緊急性がないためにそう言われてしまうんだろうな・・・と考えさせられたりしました。向こうの管理者が理解していないということが、苦労といえば苦労でしたね。

ラオスでの医療活動を行う中で得るものや感じるもの・ラオスの人々とのふれあいの中で考えさせられること

○玉井理事　ただ、向こうでは、その口唇口蓋裂患者さんが放置されていて、例えば、社会的にのけ者にされていたり、差別を受けたり、様々な不幸というんでしょうか、それを生んでいたわけですよね。思い出深い患者さんとかいらっしゃいますか？

○砂川先生　おりますよ。ラオスで診察をするといった際には、50名～60名の患者さんが来るわけですよ。全身麻酔の手術だと一日で大体、4～5例ぐらいですから、それが一週間となると22～23例ぐらいしか診れないわけです。そうすると30数名の患者さんに対しては、「来年、また来るから。」ということを話して帰さなければならないわけです。その際の患者さんのセレクションの基準は、全身状態が良いということを前提にすると、1歳のお子さんを手術するよりは、30歳代の患者さんを手術して早く社会に復帰していただきたいということから、まずは高齢者となります。または、遠方から来ている人ですね。3日間歩いて、やっとバスに乗って、一週間かけて手術を受けるために来ている人です。そのような患者さんの中で、37歳の方がいまして、手術が終った後に「ああ！これで結婚が出来る!!」と喜びの第一声を発していたこと、子どもが無意識に「ありがとう!!」と手を合わせて拝むこと、そういったこと、とても思い出深いですね。

このような現実というのは、日本では（あるのかも知れないけれども）見たことがないですね。日本人は、表現が下手なのかも知れないといった方がいいのかな。

○玉井理事　そうですね。やはり、全身麻酔が醒めたばかりで意識がまだ朦朧としているにもかかわらず、10歳ぐらいの子どもがすぐに周りにいる医療スタッフに対して拝むんですよね。僕は、そのシーンをテレビで拝見させてもらった時に、日本にはない風景だと思いました。医師があそこまで感謝されたというような思い出がないですよ。少なくとも僕はないですね。そこまで感謝されるという医療を提供することに、先生方自身も感動するのでしょうね。

○砂川先生　ええ。本当に感動しますよ。滞在日数の関係で、やむなく手術できなかった患者さんたちの顔を思い出すと、涙ながらに「来年、また来るからね。」と話をして帰るんです。活動を継続することによって、ラオスの医療スタッフの方々にもかなり理解していただくことができました。以前の副院長は、今、院長になっていらっしゃるんですが、今では一番の理解者ですよ。彼は病院長であり、ラオス国立大学の医学部長なんです。

日本（沖縄）の医療チームについて

○玉井理事　一緒に連れていかれる医療スタッフのみなさんというのは、どのようなチームなんでしょうか？　今はもう、まとまっていら

っしゃるんですか？

○砂川先生　いや、もう琉球大学のスタッフを中心としただけです。だから、口腔外科の先生が5名ぐらいで、そのうちの1人は麻酔の研修を終えた人です。あと、麻酔科の医師が1人、ナースが2人、その他にコーディネーターです。大体、10名ぐらいのミッションで行きます。ですから、ナースも向こうの先生方に手伝ってもらうし、例えば麻酔の医師は現地の麻酔の先生が対応し、各ポイントは、日本から行く麻酔の先生がきっちり抑えるということで、僕たちが扱う手術自体は、日本における医療との違いは全くありません。患者さんの対象年齢が違うだけであって、機材、器具等を全て日本から持って行くわけですから。大きな違いは、麻酔の先生ですよ。向こうは検診制度がないから、診察に来て初めて心雑音を聞いてビックリして、「あなたは、こちらでの手術よりも他の手術が必要です。」ということで案内するんですよ。胸部写真がない、血液検査が充分にされていない、胸の音さえ聞かれたことがない・・・ということなんです。学童がですよ！　だから、麻酔の先生は視診、触診、聴診器だけで決断をしないといけないということになるので、日本における医療との違いを一番感じているのは、麻酔の先生でしょうね。

○玉井理事　先生、こちらから連れて行かれるスタッフの皆さんは、喜んで参加されているんでしょうか？

○砂川先生　セタティラート病院改善プロジェクトの時には内科の先生、外科の先生も参加しているんですが、「ラオスでは内視鏡も必要だ」ということで、金城福則先生は、使命感に燃えてやっておられる。今では、内視鏡の技術協力が一番進んでいると思いますよ。

○玉井理事　実際に行くと使命感に燃えるわけですね。あちらで医療の原点というものを再発見して戻ってこられるんでしょうね。

○砂川先生　あちらでの医療に携わって患者さんの喜ぶ顔を目の当たりにすると、“医療人になってよかった”という気持ちになるんでしょうね。患者さんの喜びの表現の仕方が、日本では触れたことのないような、大げさといってもいいぐらいのものですからね。やはり医療はこうあるべきだという“医療の原点”というものがそこにあるので、一人でも多くの若い医師に経験してもらいたいと思っています。

ラオスの医療・日本の医療に欠けているもの

○玉井理事　いろんなところで、医師の偏在だとか、僻地医療だとかいう問題がいわれていますが、やはりその本質的な部分というものに目覚めてもらえれば、そのような問題を解決するための突破口になるのではないかと思ったりもするんですね。

○砂川先生　そうですね。本当にあと5年、10年経ったら、外科医まで不足する可能性がありますよ。これをどうするかというと、日本でも患者さんも素直に喜んで、医師との間のギスギスした人間関係がきちんとできれば、何も問題ないと僕は思うんですよね。

○玉井理事　先生、あと、技術移転ということについては、現地の先生方とのコネクションについてはどのようにしていらっしゃるんでしょうか？

○砂川先生　我々は、現地のセタティラート病院で手術をしており、そこには歯科口腔外科の部屋があるわけです。スタッフが9人ぐらいいるわけです。その中で一人はJICAプロジェクトで6ヶ月間、琉球大学で研修しておりますから、つながりはできるんですが、ただ、我々がいなくなった後に、彼が一人で具体的に展開できるかというと、まだそういう患者さんが受診して来ないという現状ですね。おそらく経済力の問題があるんでしょうね。経済的に裕福な患者さんは、シンガポールだとか、タイだとか、マレーシアに行って手術を受けるという現実があるわけです。

○玉井理事　砂川先生たちがあちらに行って、ボランティアで、無料で手術をするから、あちらの患者さんは手術を受けることができるわけで、向こうの医師を育成して、向こうの医師が生業として医療をするということまでには

なかなか繋がっていかないということですね。

○砂川先生　そうですね。それは、ラオス国全体の経済発展が要求されるわけですよ。まずは、やはり国の経済力ですね。

今後の展望について

○玉井理事　砂川先生、口唇口蓋裂患者支援事業については、今後の展開というのはどのようにお考えでしょうか？　どのようにしていきたいというお考えがありますか？

○砂川先生　いや。もう、これまでどおりですよ。待っている患者さんをきちんと治療していくことです。日本の場合には、スピーチセラピストもいますが、向こうにはそういうのがないですからね。今はコスメティックな改善だけですよ。ファンクションの問題はまだ先ですね。そこまでやるには、次の世代かなというふうに僕は思っています。まずは、コスメティックなことをきちんと出来て、患者さんが社会生活にきちんと復帰して、子どもたちの人材育成に繋がればと思っています。口唇口蓋裂の患者さんというのは歯並びが悪いですよね。日本では歯並びも矯正できるんですが、あちらではそれもないですからね。手術しないと、発音も悪いままですから。日本では、手術後はスピーチセラピストの指導で、きちんと改善できるようになっている。

今まで我々なりに地道に活動してきて、今回、いっぺんにスポットライトを浴びてしまったわけですが、これまでどおりの地道な活動を変えずにやっていくことが大事だろうと思っています。

○玉井理事　なるほど。ここまで社会的に騒がれて、ブームになってしまって浮き足だってしまってはいけないわけですね。

○砂川先生　そうです、そうです！　それが一番こわいでしょう。これまで20名手術していたのを30名やりました。40名やりましたということになってもいけないと思いますしね。

○玉井理事　是非、若い医師が医療の目覚める、本当の医療について考えさせられる機会というのをつくっていただけたらと思います。

○砂川先生　そうですよね。今、僕は、琉球大学の学生をボランティアで2名ぐらい連れて行きたいと考えています。学生だと、外科であろうが内科であろうがどの領域でも、患者さんに治療を施すという医師と患者との人間関係というのは一緒ですよね。そこを見てもらおうというのが今の一番の課題ですね。ひとつのミッションで2、3日間でも同行すると流れが見えるしね。そのような経験があると、もう少し、離島医療問題も解決に向かうのではないかと思いますね。

○玉井理事　先生がおっしゃるように、地に足をつけるという活動が大事だと思うんですよね。そうじゃないと若い医師たちが、ついてこないと思うんですよね。でも、砂川先生のブレない意思があれば、若い医師たちはついてきてくれるし、その意思を継いでくれると思います。

○砂川先生　私は沖縄県の歯科医師会会員ではないのですが、若い歯科医師の組織率が弱いと聞いております。それは一般開業医でも非会員が増えているということですから、それを何とかしないといけないのではないかと思っているんです。

○玉井理事　目の前の利権とか儲けとか、ギブ・アンド・テイクということを考えているんでしょうね。実は、沖縄県の医師会も、入会を希望しない医師が増えてきて、問題になってきています。

今後もこれまでと変わらない活動を地道に続けていただきたいと思います。この度は、誠におめでとうございました。

○砂川先生　はい。今後も地道に。今回の受賞は、本当にびっくりしているところですよ。ありがとうございました。これからも、歯科医師としてだけではなく、琉球大学医学部の構成員として、ご協力できることがあれば何でも致しますので、今後とも宜しくお願い致します。

インタビューアー：
広報委員　玉井　修